

一般社団法人日本カウンセリング学会第54回大会

プログラム

～カウンセリングによる心理社会的支援～

虐待・不登校・ヤングケアラー・子どもの貧困・DV・差別

〔研修会：オンデマンド配信〕

2022年8月5日(金)13:00～8月18日(木)18:00

〔大会：ライブ配信／オンデマンド配信〕

2022年8月6日(土)・7日(日)

〔大会：アーカイブ配信〕

2022年8月25日(木)10:00～9月27日(火)17:00

一般社団法人日本カウンセリング学会第54回大会準備委員会事務局

● 目 次 ●

◆ 研修会のご案内	1
◆ 大会日程	3
◆ 大会参加者へのご案内	4
◆ 大会招待講演	5
◆ 大会特別講演 I	7
◆ 大会特別講演 II	8
◆ 学会理事長講演	9
◆ 大会準備委員長講演・学長挨拶	10
◆ 日本カウンセリング学会賞受賞者講演	12
◆ 日本カウンセリング学会奨励賞受賞者講演	13
◆ 大会準備委員会企画シンポジウム	14
◆ カウンセリング心理士会企画シンポジウム	15
◆ 若手・中堅の会 企画シンポジウム	17
◆ 自主企画シンポジウム	19
◆ ポスター発表	28

日本カウンセリング学会「カウンセリング心理士新養成カリキュラム」準拠 第 54 回大会研修会のご案内

日本カウンセリング学会第 54 回大会にあたり、以下の研修会を開催いたします。

研修形態：全研修コース、オンデマンド配信です。

配信期間：2022 年 8 月 5 日（金）13 時～8 月 18 日（木）18 時迄 2 週間

研修時間：全研修コース 5 時間です。

コース	研修タイトル	講 師
A	新しいカウンセリングの理論 4 大アプローチの比較と統合 (A⑥：カウンセリングの理論と実際)	諸富 祥彦（明治大学）
B	スクールカウンセリングのこれから～チーム学校の充実をめざして (A⑥：カウンセリングの理論と実際)	石隈 利紀（東京成徳大学）
C	交流分析 - 関係性アプローチについて - (A⑥：カウンセリングの理論と実際)	島田 涼子（人間総合科学大学） 小澤 真（聖徳大学）
D	発達障害の子どもへの発達支援 - アタッチメント理論から - (B④：カウンセリング・アセスメント)	近藤 清美（帝京大学）
E	アセスメントを支援につなぐ (B②：カウンセリング・アセスメント)	東原 文子（聖徳大学）
F	コロナ禍における新しいグループ活動 (D②：カウンセリング演習)	鈴木 由美（聖徳大学 非常勤）
G	アディクション（依存症）の理解と対応法 (F①：カウンセリング諸領域)	原田 隆之（筑波大学）
H	いじめ重大事態の現状と課題 期待される心理職の役割 (F②：カウンセリング諸領域)	嶋崎 政男（神田外語大学）
I	多職種連携の課題と展望 - チーム学校の実践のために - (F③：カウンセリング諸領域)	山口 豊一（聖徳大学）
J	司法領域におけるカウンセリング技法の活用 (F④：カウンセリング諸領域)	藤川 浩（駿河台大学）

受講準備のために

ネット環境のチェック

ご使用になりたい端末が Web 会議など可能な状態か否かを調べてください。

* グーグル検索で「スピードテスト」と入力して検索する。

* 「インターネット速度テスト」が表示されたら、右下の（青い枠）「速度テストを実行」をクリック

* テストの結果、可能な状態かどうかが表示される。（あくまでも目安のテストです。）

一般的に、ストレスなく通信できるのは 10Mbps（スマホは 5Mbps）～ 30Mbps 程度とされています。

参加方法について

1 オンデマンド配信視聴の参加方法について

研修会に参加される方には 8 月 1 日（月）～ 3 日（水）までに、研修会専用のホームページに入るためのパスワード、及びコースごとに設定されているパスワードをご登録いただいた

メールアドレス宛にお送りします。

8月5日（金）13時より視聴可能となりますので、8月18日（木）18時までの期間内にご視聴ください。

2 講座の資料は研修会ホームページよりダウンロードできます。（研修会時にご自身で使用される目的以外の複製禁止）

3 研修会の録音・録画はご遠慮ください。

4 レポート提出について

研修講座の視聴確認のために、当該研修講座を受講した感想について400字以内でのレポート提出をしていただきます（学校心理士の更新ポイントを希望する人は、ご自身が当該研修講座内で重要と考えられたキーワードをレポートの巻末に5語記載してください。）レポートの提出を確認・合否判定後、修了証を発行いたします。

レポート提出フォームにアクセスし、レポートを提出してください。修了証は9月中旬以降、PDFにしてご登録いただいたメールアドレス宛にお送りいたします。

*提出可能期間 8月5日（金）～8月18日（木）18時まで

参加証・領収書について

9月初旬に、全員にご登録いただいたメールアドレス宛にお送りします。

研修会（大会）は各有資格者の更新ポイントとして認められています

カウンセリング学会カウンセリング心理士 更新ポイント

研修会の受講者 5時間 2P （大会参加者 2P）

臨床心理士資格更新ポイント

研修会の受講者 2P （大会参加者 2P）

学校心理士資格更新 B1

研修会の受講者 1P

*今大会では、学校心理士の受講証明書は、ご請求された方のみ発行いたします。

大会準備委員会事務局にご請求ください。

修了証について

受講者には、日本カウンセリング学会理事長の修了証が発行されます。

・レポート提出・合否判定後にご登録いただいたメールアドレス宛にお送りいたします。

大会日程

	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
8/5 (金) 13:00～ 8/18 (木) 18:00	オンデマンド					研修会 10 講座 * 1 講座 5 時間 受講登録し受講料納入した講座はオンデマンドで視聴可。 8/18 (木) 迄に受講登録し既定の書式でレポート提出により 受講証明証を発行する。				

	9:45	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
8/6 (土)	ライブ配信	大会長講演／ 学長挨拶 ライブでの録画配信	理事長講演 ライブでの録画配信	ランチタイム		ライブ配信 特別講演Ⅰ 渡邊直(千葉県中央児童相談所)		ライブ配信 大会準備委員会企画シンポジウム		若手・中堅の会企画シンポジウム ライブでの録画配信	
	オンデマンド	自主企画シンポジウム (動画)									
	オンデマンド	ポスター発表 (PDF)									

	9:45	10:00	11:20	12:40	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	
8/7 (日)	ライブ配信	会員集会 各賞受賞者講演 ライブでの録画配信	招待講演 ラスティン先生 ライブでの録画配信	ランチ タイム		ライブ配信 特別講演Ⅱ 松本俊彦(国立精神・ 神経医療研究センター)		ライブ配信 カウンセリング心理士会 企画シンポジウム		
	オンデマンド	自主企画シンポジウム (動画)								
	オンデマンド	ポスター発表 (PDF)								

- ① 大会期間配信：2022/8/6～ 2022/8/10 17:00 迄 (ただし、LIVE 配信は決まった時間のみの視聴となります。ご注意ください。)
- ② 大会参加費を納入した方は、大会終了後、すべての大会発表項目を 8/25～9/27 アーカイブで視聴が可能。
- ③ 研修会は、8/5～8/18 のみのオンデマンド配信となります。

大会参加者へのご案内

1 ライブ配信視聴の参加方法について

大会に参加される方には8月1日（月）～3日（水）までに、WEB大会専用のホームページに入るためのパスワードをご登録いただいたメールアドレス宛にお送りします。

8月6日（土）9時45分より視聴可能となります。

*インターネット環境の不具合で参加に支障があります際には、アーカイブ配信をご視聴ください。

2 Zoom ウェビナーによるライブ配信となります。

*スマートフォン・タブレットをご使用の場合は、事前にZoomのアプリのダウンロードとインストールをお願いいたします。

*氏名を所属と氏名（フルネーム）で表示してください。

*参加者の方は、事前にマニュアルをご確認ください。

インターネット環境に関する不具合は、主催者側では対応いたしかねます。
各自インターネット環境の調整をお願いいたします。

招待講演

8月7日(日)
11:20～12:40
ライブでの録画配信

カウンセリングの心理社会的役割

Speakers (within the training video) : Ms Margaret Rustin & Peter Slater

司会：鈴木 由美（聖徳大学 非常勤）



講演概要

I will begin the lecture with some observations about the place of counselling support in educational settings in the contemporary world. I will make reference to the high level of mental health difficulties among adolescents and young adults which has been exacerbated by the global pandemic. Psychoanalytically based counselling is based on an appreciation of the importance of both conscious and unconscious anxiety and of the particular challenges facing young people in our globalised world. The containment which a counselling relationship can offer can allow young people to feel their problems have been recognised and that understanding may be possible. This can help them to re-engage with the difficult tasks of their academic work and their personal journey through adolescence and towards independence.

Peter will then present some material from a work discussion group about the support of a 14 year old in a school context. He will discuss both the nature of the young person's anxieties and their impact on the school staff, and show how this could be better understood through observing the process within the discussion group.

The lecture will thus link the problems of individual students with the nature of the containment the school / college is able to provide for its staff. This in turn depends on the availability of some protected thinking space.

講義の冒頭で、現代社会における教育現場でのカウンセリング支援の位置づけについて、いくつかの考察を述べたいと思います。世界的なパンデミックにより、青少年や若年成人へ与えた精神衛生上の困難さはハイレベルに達していることについて言及します。

精神分析に基づくカウンセリングは、意識と無意識の両方の側面からきた不安の重要性、そしてグローバル化した世界において若者が直面している特別なチャレンジを理解することが基本となります。カウンセリングによって生み出される関係性をもって封じ込めることにより、若者は自分の問題が認識され、理解が得られるかもしれないと感ずることが出来ます。そうすることで、学業という困難な課題に再び取り組むことができ、思春期を経て自立に向かう道へと進むことができるのです。

その後、ピーターより、学校における14歳の子供の支援に関するワーク・ディスカッション・グルー

プからいくつかの資料を発表します。若者の不安の性質と、それが学校スタッフに与える影響の両方について説明し、ディスカッショングループ内のプロセスを観察することによって、それがどのように理解されうるかを示します。

この講義では、個々の学生の問題と、学校／カレッジがスタッフに対して提供できる封じ込めの性質とを結びつけて考察していきます。

プロフィール

Margaret Rustin (マーガレット・ラスティン)

タビストック・クリニック・コンサルタント子ども・青年心理療法士。

1986年から子どもの心理療法士長。精神分析的観察アプローチの訓練を集団内

および他の多くの国に拡充していく先鞭をつけ、それをサポートしてきた。

マイケル・ラスティンとの共著に「Narratives of Love and Loss」「Mirror of Nature」がある。

共編著に「Closely Observed Infants」「Psychotic States in Children」「こどものこころのアセスメント Assessment in Child Psychotherapy」がある。

特別講演 I

8月6日(土)
13:00～15:00
ライブ配信

人と人との穏やかなコミュニケーションの接点を求めて

渡邊 直 (千葉県中央児童相談所長)

司会：鈴木 由美 (聖徳大学 非常勤)



講演内容

対人場面においてヒトは「してほしくないことをされる」あるいは「してほしいことをしてもらえない」場面に直面すると、脳と身体の反応として、つい、“乱暴”なコミュニケーションを用いてしまう傾向にあるといます。これは、この状況が生命体にとってはストレスになるので、身の安全を確保しようと、目の前からいち早く“生命を脅かすもの”を除去しようとしての反応なのだそうです。

コロナ禍においては、外出自粛やリモートワークの推進、保育園の休園などにより、ルーティンが刻めなくなる中、始終同じ顔を突き合わせているとキレる沸点が低くなり、家庭内等のトラブルが増えました。ストレスは、「(ひ) 否定する」

「(ど) 怒鳴る」とか「(い) いやみをいう」「(お) 脅す」「(と) 問いただす」「(ぎ) 疑問型でいう」「(ば) 罰する」「(なし) なじる」「頭文字つづりは『ひどいおとぎばなし』』という感情に任せた“乱暴”なコミュニケーションで発散してほしくありません。そうする前にいったん立ち止まって落ち着く必要があります。「ひどいおとぎばなし」を意識して、これら八枚の行動(ことば)の切り札(カード)を切りそうになったら、意識的に“気づきスイッチ”を入れて「ほまれかがやきを」のカードに切り替えること。これをみんなのできるようになるといいですね。「ほまれかがやきを」は、「(ほ) 褒める」「(ま) 待つ」「(れ) 練習＝一緒にする」「(か) 代わりにしてほしいことの明確化」「(が) 環境づくり」「(や) 約束」「(き) 気持ちに理解を示す」「(を) 落ち着く」の八枚のカードです。これを人に教える前にまずは自分にインストールしましょう。

「ほまれかがやきを」が、家族、コミュニティ、みんなの合言葉となれば、お互いに声かけあうことができるようになります。人に優しい支えあいのコミュニティ文化の形成に向けて、ひとりで完璧を気負わず、みんなで取り組みましょう。

プロフィール

1988年、千葉県庁に心理職として入庁。健康福祉部児童家庭課等を経て児童相談所に勤務。診断指導課長、調査課長、銚子・市川・柏の児童相談所長を経て、現職(中央児童相談所長)。日本子ども虐待防止学会代議員、千葉県公認心理師協会理事。

主な著書(共著)

- ・「子ども虐待対応におけるサインズ・オブ・セーフティ・アプローチ実践ガイド」 明石書店 (2017)
- ・「児童福祉施設における性的問題対応ハンドブック」 生活書院 (2022)
- ・「公認心理師の基礎と実践 第14巻『心理的アセスメント』」 遠見書房 (2019)
- ・「発達157号 虐待対応のこれから 虐待の早期発見と支援のあり方 非暴力コミュニケーションパッケージ『機中八策[®]』頭文字つづりで覚える非暴力コミュニケーションの具体策」 ミネルヴァ書房 (2019)
- ・「よくわかる社会的養護内容」 ミネルヴァ書房 (2015)

特別講演Ⅱ

8月7日(日)
13:00～15:00
ライブ配信

思春期の自傷・OD・自殺～自殺予防の最前線～

松本 俊彦 (国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 薬物依存研究部 部長)

司会：都丸けい子 (聖徳大学)



講演内容

コロナ禍で児童・生徒の自傷・市販薬乱用・自殺が増加している。その背景には、友人関係の疎隔化し、「Stay Home」による家庭内における人間関係の「密」化と、子どもたちの孤立化、援助希求能力の低下があるように思われる。今回の講演では、リストカットなどの自傷行為を軸に、その理解と対応の原則を述べたい。

自傷行為は、通常、激しい怒りや不安、緊張、気分の落ち込みといったつらい感情を緩和するために行われる。その意味では、「死ぬこと」を目的とする自殺企図とは区別される行動といえる。典型的な自傷行為は、一人きりの状況で行われ、周囲の誰にも告白されない。したがって、自傷行為は、援助者がしばしば誤解しているような、「人の気を引くためのアピールの行動」とは本質的に異なり、むしろ孤独な対処方法と理解するべきである。

しかしその一方で、自傷行為には二つほど深刻な問題点がある。一つは、結局のところそれは一時しのぎにすぎず、長期間にはかえって事態が複雑化・深刻化させることが少なくないという点である。もう一つは、自傷行為は、繰り返されるうちに麻薬と同じく耐性を獲得し、それに伴ってエスカレートするという点である。やがて耐性獲得の結果、当初と同じ程度の「鎮痛効果」を得るために、自傷行為の頻度や強度を高めざるを得なくなる。最終的には「切ってもつらいが、切らなきゃなおつらい」という事態に至ると、「消えたい」「死にたい」という考えを抱く若者も少なくない。要するに、自傷行為は「生き延びるために」繰り返されながら、逆説的に死をたぐり寄せてしまう行動といえる。さらに、自傷行為を自殺へとエスカレートさせる要因として、市販薬の乱用がある。

今回の講演では、自傷行為に対する理解を深めるとともに、市販薬乱用を理解するための基本的情報を提供し、こうした事態への援助者のあるべき態度について論じる予定である。

プロフィール・主な著書

1993年佐賀医科大学卒業。神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学医学部附属病院精神科、国立精神・神経センター精神保健研究所の司法精神医学研究部専門医療社会復帰研究室長、同 自殺予防総合対策センター自殺実態分析室長、副センターなどを経て、2015年より現職。2017年より国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター センター長を併任。日本精神科救急学会理事、日本社会精神医学会理事、日本学術会議アディクション分科会特任連携委員。

主著に、「自分を傷つけずにはいられない～自傷から回復するためのヒント」(講談社, 2015)、「もしも「死にたい」と言われたら～自殺リスクの評価と対応」(中外医学社, 2015)、「薬物依存症」(筑摩書房, 2018)、「誰がために医師はある～クスリとヒトの現代論」(みすず書房, 2021)などがある。

カウンセリングの今、そしてこれから

沢宮 容子 (筑波大学人間系教授)

司会：笈田 育子 (NPO 法人カウンセリング教育サポートセンター)



講演概要

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の脅威が世界に広がってから2年が過ぎました。また、この2年間で、Zoom や Teams などのWeb コミュニケーションツールの一般化、リモートワークの普及など、いわゆるデジタル・トランスフォーメーション (DX) が一気に加速しました。コロナがDXの進行に拍車をかけた形です。これらのことは、私たちのカウンセリングにも大きな影響を与えています。私の考える「カウンセリングの今、そしてこれから」について、お話をしたいと思います。

プロフィール

筑波大学人間系教授。博士 (心理学) (筑波大学)。

カウンセリング心理士、日本カウンセリング学会認定スーパーバイザー、臨床心理士。

2013年4月 - 現在筑波大学 人間系 教授

筑波大学大学院教育研究科カウンセリング専攻修了。立正大学心理学部臨床心理学科助教授、教授等を経て、現職

2009年 日本カウンセリング学会独創研究 - 内山喜久雄記念賞受賞

2015年 筑波大学人間系優秀教員賞受賞

2007年～2010年常任理事、2010年～2018年事務局長、2018年～2022年(6月)副理事長、2022年(6月)～理事長

主要論文、著書

「心理臨床における動機づけ面接」精神療法, 47, 663-669.

「楽観的帰属様式の臨床心理学的研究」風間書房

「人を育む愛着と感情の力: AEDPによる感情変容の理論と実践」福村出版

『臨床実践を導く認知行動療法の10の理論: 「ベックの認知療法」から「ACT」・「マインドフルネス」まで』星和書店

他, 論文, 著書多数

学校における援助サービスのマネジメントの機能

ーマネジメント委員会を中心としてー

山口 豊一 (聖徳大学)

司会：沢崎 真史 (聖徳大学)



講演概要

学校心理学は、心理学と学校教育を統合した学問体系であり、双方の領域に関する多くの分野の理論や方法によって構成されます。学校教育において一人ひとりの子どもが学習面、心理・社会面、進路・キャリア面、健康面における課題への取り組みの過程で出会う問題状況の解決を援助し、子ども成長する心理教育的援助サービス（以下、援助サービス）の理論と実践を支える学問体系です（石隈, 1999）。

子どもたち援助ニーズは多岐にわたります。子どもたちの悩みや不安には4つの領域あり、それに加えて発達障害による悩みも増えてきています。さて、学校心理学では3段階の援助サービスをもとに、その子どもにとってどのようなサポートが望ましいかを考えていきます。援助サービスには、個別の援助チーム、コーディネーション委員会、マネジメント委員会という3つの組織・体制があり、今回はマネジメント委員会に焦点を当てていきます。マネジメント委員会は情報共有・問題解決、教育活動の評価と見直しの機会となるだけでなく、校長の意思の共有もできる、学校にとって大変重要な委員会です。

マネジメント委員会の機能が、チーム援助にも大きく影響してきます。チーム援助とは、「複数の援助者が共通の目的をもって役割分担しながら、子どもの援助にあたること（石隈・田村, 2003）」を指します。チーム援助においては、コーディネーターの存在も大切です。「チームとしての学校(文部科学省, 2015)」の実現に向け、校長のリーダーシップのもと、情報共有と問題解決の機能を高め、主任層が運営する学年会・委員会の活用体制を築くことが重要です。この講演では、マネジメント委員会が機能することで、チーム援助の体制が整い、それに伴い多職種の心理の専門家であるスクールカウンセラーの活用が促進されていくということをお伝えできればと思います。

プロフィール

聖徳大学心理・福祉学部心理学科教授、同大学大学院臨床心理学研究科教授、同大学附属心理教育相談所所長。筑波大学人間総合科学研究科博士後期課程修了、博士（カウンセリング科学）。茨城県の公立小・中学校教諭、茨城県教育研修センター指導主事、跡見学園女子大学文学部臨床心理学科教授、同大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻教授。同大学附属心理教育相談所所長を経て、現職。

学校心理士 SV、公認心理師、臨床心理士、特別教育支援士 SV、ガイダンスカウンセラー。

主要論文、著書

『中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連』カウンセリング研究, 37, 241～249.

『学校マネジメントがチーム援助体制、心理職活用およびチーム援助行動に与える影響』カウンセリング研究, 52, 33～46.

- 『チーム援助で子どもとのかかわりが変わる』ほんの森出版, 2005 (共著)
- 『カントに学ぶ教育・臨床の人間学』図書文化社, 2008
- 『中学校の学校マネジメント委員会に関する研究』風間書房, 2012
- 『学校での子どもの危機への介入：事例から学ぶ子どもの支援』ナカニシヤ出版, 2015 (共著)
- 『学校心理学にもとづく教育相談－「チーム学校」の実践を目指して－』金子書房, 2018 (共著)
- 『新版 学校心理学が変える新しい生徒指導』学事出版, 2020 (共著)
- 『発達が気になる子へのアウトリーチ型支援』岩崎学術出版社, 2021 (共著)
- 『学校心理学の理論から創る生徒指導と進路指導・キャリア教育』, 2022 (共著) など

私のカウンセリング心理学

— 学生相談、マイクロカウンセリング、発達カウンセリングと「甘え」 —

玉瀬 耕治 (奈良教育大学名誉教授)



講演内容

この度は学会賞をいただき、誠に光栄に存じております。この機会に私が考えております自己の研究をふまえたカウンセリング心理学についてお話させていただきます。私は大学を卒業後、母校奈良教育大学の助手として採用され、同時に学生部の学生相談員を兼務することになりました。その関係で幸いなことに、翌年、九州大学で文部省が支援する長期研修(3か月)に参加することができました。ここでの研修が私のカウンセリング分野に関する力量の基礎となっております。

母校では心理学分野の基礎的研究に取り組みましたが、当初の問題意識はカウンセリングで「フンフン」とか「フーン」という「はげまし」がその後の言語行動にどう影響するのかということにありました。その後、関心はバンデュエラのモデリング理論との関連づけに移行していきました。モデリングの効果は当初私が予想したものよりはるかに大きなものでした。博士学位取得後は、それまでの研究を踏まえた臨床分野での研究を模索しておりました。ほどなくアレン・アイビ教授が提唱する「マイクロカウンセリング」に出会い、これをモデリング研究の応用分野として位置づけました。その後は、在外研究をきっかけにアイビ教授の指導を受け、マイクロカウンセリングの研究に取り組んでいきました。

その流れの延長で、アイビ教授が新たに提唱した「発達カウンセリング・心理療法」にも魅力を感じ移行していきました。この理論はピアジェの認知発達理論を援用しつつ、クライアントの状態を理解しようとするものです。クライアントの認知発達状態を表す4つのスタイルが識別され、それらに応じたより効果的なかわり方が模索されます。私は現在、4つの認知発達のスタイルを土居健郎の「甘え」の理論と関連づけて考えています。それらは「甘え」の受容、適切化、客観視、対象化の問題です。そこには研究テーマとして無限の可能性があり、スーパービジョンでの活用が期待できます。

プロフィール

兵庫県生まれ。奈良学芸大学卒業、同専攻科修了。奈良教育大学教授を経て帝塚山大学教授。奈良教育大学名誉教授。教育学博士(筑波大学)。臨床心理士。日本カウンセリング学会認定スーパーヴァイザー。

主要著書、論文

玉瀬耕治 (1998). カウンセリング技法入門 教育出版

玉瀬耕治 (2008). カウンセリングの技法を学ぶ 有斐閣

玉瀬耕治 (1990). 基礎的なカウンセリング技法の習得に及ぼすマニュアルとモデリングの効果 カウンセリング研究, 23, 1-8.

玉瀬耕治 (2014). マイクロカウンセリングから発達カウンセリング・心理療法へ 帝塚山大学心理学部紀要, 3, 1-9.

奨励賞受賞者講演

8月7日（日）
10:30～11:00
ライブでの録画配信

学校におけるソーシャルスキル・トレーニングを 成功に導くには？

—アセスメントと般化の観点から—

新川 広樹（弘前大学教育学部）



講演内容

児童・青年のこころの健康問題を予防するために、学校現場では予防的・発達促進的介入として、さまざまな集団プログラムが実施されている。その中でも「学級単位の集団ソーシャルスキル・トレーニング（Classwide Social Skills Training: CSST）」は、本邦において多くの効果検証研究が進められており、その汎用性の高さからも、定番のプログラムとして位置づけられていると言って良いだろう。実際、2022年度に改訂予定の「生徒指導提要（改訂試案）」においては、予防的教育相談の活動例として「ソーシャルスキル」の文言が何度も登場している。本講演では、このソーシャルスキルを主題とした2つの研究を紹介する。

1つ目はCSSTの効果検証に利用することを目的とした児童生徒用ソーシャルスキル尺度「Hokkaido Social Skills Inventory（HSSI）」の標準化に関する研究である。HSSIは小学校低・中・高学年版、中学校版、高校版の全5版で構成され、各学年・学校段階に応じた内容のソーシャルスキルを評価可能な尺度である。本研究では、自己報告式尺度の国際的ガイドラインであるCOSMINに準拠し、小学1年生から高校3年生までの全12学年の児童生徒4,477名を調査対象としてHSSIの信頼性・妥当性・反応性を検証した。

2つ目はCSSTにおいて使用された般化促進方略の概念を整理した研究である。一定のプロトコルに沿って進められる介入手続きとは違い、日常場面へのスキルの般化を促進させるための手続きは多岐にわたっており、それぞれの実践例がどのように般化に寄与しているかは明らかでない。本研究では、CSSTの実践研究35編をレビューし、Stokes & Osnes（1989）の枠組みに基づいて多岐にわたる般化促進方略の手続きを機能的側面から分類することを目的とした。

上記の2つの研究の成果を踏まえ、今後のCSST研究がどのように発展していくことが見込まれるかについて、考えを述べたい。

略歴

北海道医療大学にて臨床心理学を専攻し、2020年に博士号を取得。その後、弘前大学子どものこころの発達研究センター特任助教を経て、2021年より弘前大学教育学部助教に就任。児童・青年のメンタルヘルスに関する調査・介入研究に従事し、2020年に日本ストレスマネジメント学会優秀論文賞、2021年に日本カウンセリング学会奨励賞を受賞。著書に「オンラインとオフラインで考える特別支援教育（分担執筆、明治図書）」。

チーム学校によるスクールカウンセリングのこれから

企 画：山口 豊一（聖徳大学）
話題提供：半田 一郎（茨城県スクールカウンセラー）
 家近 早苗（大阪教育大学）
 倉岡 正英（茨城県教育委員会）
 小松 智樹（石岡市立杉並小学校長）
指定討論：石隈 利紀（東京成徳大学）

スクールカウンセリングは、学校における心理教育的援助サービス（以下、援助サービス）と言えます。そして、スクールカウンセラー（以下、SC）やスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）などの専門的ヘルパー、教師などの複合的ヘルパー、保護者などの役割的ヘルパー、友人などのボランティア的ヘルパーによる「チーム援助」、そして学校、家庭、地域社会や専門機関などの「連携・協働」が、援助サービスの鍵を握ります。

いま、「チームとしての学校」（チーム学校）の具現化・具体的実践が叫ばれています。子どもや環境に関するアセスメント、援助サービスを促進するコンサルテーション・コーディネーション、さらにマネジメントについての研究や実践が蓄積されつつあります。

そこで、本シンポジウムでは、まず援助チームのメンバーであるSCの先生より話題提供をいただきます。次に、学校においてSCやSSWを活用するマネジメントをする立場の管理者である校長先生より話題提供をいただきます。そして、援助者であるSCやSSW、要援助者である子どもや保護者との連絡・調整を担うコーディネーターの立場より話題提供をいただきます。さらに、実際にSCやSSWなどを採用・配置をする立場の教育委員会指導主事の先生より、教育行政の立場からの話題提供をいただきます。

最後に、各シンポジストの話題提供を受けて、「チーム学校におけるスクールカウンセリングのこれから」を踏まえて、指定討論をいただきたいと思います。子ども一人ひとりに適切な援助サービスが届く、スクールカウンセリングの在り方について議論を深めたいと思います。

安全が脅かされた人々への支援

司会者：小林 正幸（東京学芸大学）
話題提供者：井ノ山正文（教育環境研究センター）
松本 剛（兵庫教育大学）
市井 雅哉（兵庫教育大学）
企画者：松本 剛
小林 正幸

はじめに

今般、3年にわたり新型コロナウイルス Covid-19 によるパンデミックは継続し、新たな感染症の発生も報じられるなど、まだ安全にはほど遠い。そして、2022年2月からのウクライナでの大規模な戦禍が起き、報道やSNSで連日それを目にしている。

そのような時代の空気の中で、不安や恐怖を味わっている人々、感覚的に安全が脅かされた人々が、老若男女を問わず大勢いるように思われる。

このような社会事情を意識して、「コロナ禍」「紛争」等により、時代として「安全が脅かされた人々」を視野に入れます。それらの人々に、カウンセリング心理士（旧認定カウンセラー）は、何を意識し、どのような援助を行うことが求められるのかを考えたい。

1. 話題提供者の紹介

話題提供者は以下の3名にご登壇いただく。

① 井ノ山正文

教育環境研究センター代表、カウンセリング心理士会東京支部長。学校の教員の経験が長く、実践の体験に基づいた取り組みと研究を展開している。

② 松本 剛

兵庫教育大学教授。専門は、臨床心理学、教育相談、人間性心理学。

③ 市井 雅哉

兵庫教育大学発達心理臨床研究センター・トラウマ回復支援研究分野教授。専門は臨床心理学。日本EMDR学会理事長。トラウマ治療に特化したEMDRの研究と実践の第一人者。

2. 話題提供の概要

(1) 対人関係回復のためのSIG（井ノ山正文）

井ノ山正文先生からは、「対人関係回復のためのSIG」* SIG: Social Interaction Games（対人関係ゲーム）について話題提供をしていただく。これは発声や身体運動などの遊びを通して社会的場面による過度の不安や緊張を拮抗制止するもので、対人的な不安や恐怖を軽減し、良質な対人関係場面の提供により、対人的な不安や恐怖への一つのアプローチの提案が期待される。

(2) レジリエンスを育むフォーカシング（松本剛）

松本剛先生からは、紛争で傷ついた人々に行われた「レジリエンスを育むフォーカシング」に関して話題提供していただく。アフガニスタンでタリバンなどから受けた虐待行為による PTSD への対応として、具体的な事柄を伝える必要なく、自分の思いにふれていくフォーカシングの技法の応用についてご紹介いただく予定である。

(3) 安全を脅かされた人々を支えるために（市井雅哉）

市井雅哉先生は、トラウマ治療に用いられる EMDR の実践家、研究の第一人者として、ここ数年のパンデミックや紛争などが人々のところに及ぼす影響と、カウンセリングに関わる実践者に求められる視点、そして、支援の要諦について、話題提供をしていただく。

以上の3名の話題提供を受けて、後半は、司会者も参加して、本シンポジウムの標題「安全が脅かされた人々への支援」について話を深めていくことにしたい。

キーワード：社会不安、PTSD、支援

若手・中堅心理支援者の考える、これからの学会間連携・協働 ——心理支援の実践領域を中心に——

企画：日本カウンセリング学会 若手・中堅の会
司会者：永井 智（立正大学心理学部・本学会若手・中堅の会）
企画趣旨：益子 洋人（北海道教育大学札幌校・本学会若手・中堅の会）
話題提供：井上 和哉（早稲田大学人間科学学術院）
話題提供：山崎 孝明（こども・思春期メンタルクリニック）
話題提供：森川 夏乃（愛知県立大学教育福祉学部）
指定討論：末武 康弘（法政大学現代福祉学部）

企画趣旨（益子 洋人）

実践者や研究者にとって、学会が数多く存在することにはメリットとデメリットがある。メリットとしては、関心の近い同業者と出合いやすい、専門的な研修に参加しやすい、専門に特化した文献から学びやすい、などが挙げられる。一方、デメリットとしては、会員にとっては、選択肢が多すぎてコミットする学会を選びにくいことや会費が嵩むこと、各学会にとっては、若手会員の減少や大会の引き受け手が見つからないこと、心理支援業界にとっては、学会が認定する多種多様な資格によりクライアントが混乱することなどが挙げられる。そして、昨今では、このデメリットが目立ちつつあるように思われる。

このような現状を踏まえ、心理支援業界には、少しずつ「まとまりを志向する動き」が見られ始めている。こうした動きをより促進していくには、別々の場所で「まとまろう」と声を上げることに加え、多様な意見、価値観を持つ心理支援者が一堂に会して、「まとまることに関する思い」を（賛成でも反対でも）共有し、業界の中でシェアしていく必要があるだろう。

そこで企画者は、まず、本学会と同様に心理支援を旨とする学会の若手・中堅の先生方と、率直に言葉を交わしたいと思い至った。本邦の将来の心理支援を担う若手・中堅の先生方は、学会間の「まとまりを志向する動き」に対し、どのような意見や考えを抱いておられるだろうか。また、もしも企画者と同様、前述したデメリットを解決する必要があると考えていただけるならば、どのような方略をとりうると思われるだろうか。

本企画の目的は多層的である。すなわち、学会を越えて共存・共栄への第一歩を踏み出そうとすることや、心理支援業界全体の課題として若手・中堅がどのような困難を感じているのかを発信することなどである。心理支援の未来に関心を抱く皆様と考えるシンポジウムとしたい。

各学派の共通言語として Process-Based Therapy の可能性、若手から見た各学会の課題点（井上 和哉）

日本の心理療法をより発展させていくために、心理療法の各学派は門を閉ざさず、互いに話し合える環境の構築が重要であると考えられる。その際の共通言語として、本話題提供では、Process-Based Therapy の可能性について言及する。また、若手から見た各学会の課題として、一般社会に対する心理学的知見の発信力の低さとそれが抱える諸問題、心理支援業界の若手育成意識の乏しさ、学会運営の在り方について問題提起したい。

わかりあうことではなく、見知ることを目指して（山崎 孝明）

私は、拙著でも「闘争の時代から寛容の時代へ」と記したように、「まとまりを志向する動き」には肯定的である。というより、それしか心理職が生き残っていく道はないだろう。心理職は内部分裂を繰り返してきたが、それは個々の心理職の価値観が多様だからである。皆が同じ考えを持つことは現実的ではない。私たちに求められることは、お互いを見知り、相手には相手の事情があることを知り、無駄に攻撃しあわないで済む関係を築くことだろう。本シンポがその端緒となることを願う。

研究、学問の質のためには…（森川 夏乃）

研究、学問の質を考えた際、多数の学会が存在すること、あるいはまとまること、それぞれの長短があり、現段階では結論が出せずにいるところです。例えば、多数の学会が存在することで学会構成員がほとんど身内ようになってしまった場合、査読の質が保たれるのかという疑問があります。まとまることで、先述した疑問は解決できる一方、多様性を保証しなければ“主流”を作ってしまうことにもなるでしょう。いかに相互が連携するのか、まとまるかを協議することが重要なのではないかと考える次第です。

S-1

さまざまな職域での新しいカウンセリング支援

- 企画者・指定討論者：藤生 英行（筑波大学）
- 司 会 者：宮道 力（岡山大学）
- 話 題 提 供 者：小川 妙子（筑波大学）
勝野 美江（徳島県）
藤江 玲子（松本大学）
野口理英子（東京福祉大学）
吉原 寛（弘前大学）

【企画要旨】

コロナ時代の現代、新しいカウンセリング支援が必要となっている、今回、自主企画シンポジウム「さまざまな職域での新しいカウンセリング支援」をテーマとし、経験を積む方に現場での課題、提案等話題提供をお願いした。話題提供者それぞれの立場から、カウンセリング支援という視点からやり甲斐、課題、新しい提案について話題提供を頂く。これらを受けて、藤生が指定討論者としてフロアの方の経験や知識等お力を拝借しつつ、本テーマについて議論を進めたいと考えている。

S-2

ひきこもり状態における心理社会的実践と個人差要因

●企画者・司会者：野中 俊介（東京未来大学こども心理学部）

●話題提供者：久保 浩明（宮崎大学医学部）

境 泉洋（宮崎大学教育学部）

関水 徹平（立正大学社会福祉学部）

●指定討論者：加藤 隆弘（九州大学大学院医学研究院）

【企画要旨】

「ひきこもり」は状態像がきわめて多様であり、それらの状態像に応じた体系的な支援体制は必ずしも確立されていない現状にある。

ひきこもりに関する相談は家族から始まるケースが多いことから（伊藤，2003）、心理社会的な実践としても、ひきこもり状態にある本人に対する支援ばかりでなく、その家族に対する支援（Kubo et al., 2020）に焦点を当てた研究も少なくない。さらに、当事者同士のセルフヘルプ要素を含む、ひきこもり経験者の当事者活動（関水，2018）も回復過程の1つとして注目されている。このように、さまざまな実践形態が用いられる一方で、状態像が多様であることを考慮すれば、それぞれの実践形態の効果に影響を及ぼす個人差要因を明らかにすることも状態像に応じた支援体制を構築するうえで重要であろう。

そこで本シンポジウムにおいては、久保浩明氏に「家族支援に関する実践」、境 泉洋氏には「本人支援に関する実践」、関水徹平氏には社会学の立場から「当事者活動に関する実践」について報告を行なっていただき、ひきこもり状態における心理社会的実践とそれらの効果を左右する個人差要因に関する取り組みの現状と今後の課題について議論することを予定している。

S-3

読書カウンセリング、森林散策カウンセリング、呼吸法の役割について

- 企画者・司会者：林 潔（白梅学園短期大学）
- 司会者・話題提供者：平宮 正志（神田外語大学）
- 話題提供者：竹内 啓恵（東京農業大学）
高橋 良博（駒澤大学）

【企画要旨】

学校の相談室と保健室、図書室との関連についてはすでに指摘されている。森林アメニティには心身を支え癒す力がある。禅の呼吸法の生理、心理的機能については、九州大学・駒沢大学の秋重らによって長らく研究が進められていた。今回は読書、森林散策、呼吸法のカウンセリング、心理療法的機能についてご紹介いただく。

S-4

コミュニケーションリテラシーの育成による社会的支援

- 企画者・司会者・話題提供者：水野修次郎（ライフデザインコンサルティング研所）
- 話題提供者・指定討論者：新目 真紀（職業能力開発総合大学校）
- 話題提供者：津田 尚廣（なにわ橋法律弁護士）

【企画要旨】

水野・新目は『コミュニケーションリテラシーの教科書』（東京電解大学出版局、2020年）を出版しました。実践教育という意味では、職業能力総合大学校での授業や職業教育の一貫として働く人やキャリアコンサルタント、一般企業の人事担当者へのワークショップ実施を通して職業教育やリカレント教育としてコミュニケーションリテラシーの育成する教育を实践から生まれた教科書です。津田尚廣（弁護士）からは、一般社団法人ピアメディエーション学会での活動、特に大阪府立茨田高等学校での15年以上にわたるコミュニケーション教育の实践とその結果により、退学率の劇的な改善について報告をします。司会である水野修次郎からは、社会構成主義アプローチによるカウンセリングがコミュニケーションのありかたに大きなインパクトがあるという報告をします。

S-5

子どもへの向精神薬使用の現状を踏まえ、「発達障害」を理由とする面会交流拒否の問題を考える

- 企画者・司会者：木附 千晶（文京学院大学）
- 指定討論者：青木 智子（平成国際大学）
- 話題提供者：嶋田 和子（フリーライター）
黒柳 裕（子どもの権利条約（CRC）日本）

【企画要旨】

面会交流は、子どもが、離婚や別居により離れてくらす親（別居親）とも関係性をつくり、愛されていると実感しながら成長発達するための大切な権利である。しかし、面会交流できているのは、父子世帯の45.5%、母子世帯では29.8%に過ぎない（厚生労働省「平成28年度全国ひとり親世帯等調査」）。子どもと共に暮らす親（同居親）が、面会交流を拒否する理由に、「子どもの発達障害（＝自閉症スペクトラム）」をあげることがある。その背景には、「発達障害」と呼ばれる子どもの著しい増加がある。また、医療経済研究機構（2014）によると、13～18歳でADHD治療薬を処方された割合は、2002～2004年と2008～2010年を比較すると2.5倍、抗うつ薬、向精神薬はそれぞれ1.4倍に上った。子どもへの投与の影響は、未だ研究途上であり、国連「子どもの権利委員会」も発達障害への安易な投薬を危惧している（2010・19年『最終所見』）。本シンポジウムでは、(1)子どもの投薬治療の現状を明らかにし、(2)「発達障害」を理由として面会交流を拒否する同居親の心情を探り、(3)子どもの福祉にかなう面会交流に向けた心理職の役割を探る。

S-6

子どもの成長発達を支える面会交流と子どもの意見表明

- 企画者：青木 智子（平成国際大学）
- 話題提供者：福田 雅章（一橋大学）
森本 京介（子どもの権利条約（CRC）日本）
- 指定討論者：木附 千晶（文京学院大学）

【企画要旨】

面会交流は、親の別居や離婚により離れて暮らす一方の親（別居親）と子どもが関係性をつくる大切な権利である。親の離別後も、子どもが両親の愛情を確信しながら成長発達することが、子どもの社会適応や良好な対人関係、人格形成や学業成績等に重大な影響を与えることは様々な先行研究に明らかである。しかしながら、同居親の「別居親に会わせたくない」とする考えが「子どもの意思」として伝えられることも少なくなく、「子の意思」の意図がするところが十分に理解されているとは言い難い現状にある。

そこで、本シンポジウムは（1）改正児童福祉法を意識しながら国連の指摘する「子の意思」の本質を探り、（2）子の成長発達との関係を考え、（3）面会交流の現場で「子の意思」をどう捉えるべきかを明らかにする。

S-7

対人関係ゲームのさらなる可能性を求めてⅦ ～個と集団が共に育つ人間関係づくりの実現のために～

- 企画者・司会者：岸田 優代（長野県スクールカウンセラー・信州大学非常勤講師）
- 話題提供者：大澤 靖彦（桐生大学）
西澤 佳代（長野障害者職業センター）
吉岡 典彦（長野市立更北中学校）
- 指定討論者：中村 恵子（東北福祉大学）
田上不二夫（田上カウンセリング研究所）

【企画要旨】

現在、教育現場では、個と集団が共に育つ豊かな学級集団づくりを目指し、様々な取り組みが行われている。その中であって、対人関係ゲームによる学級集団づくりの取り組みからは、多くの個と集団が共に育つ実践研究が報告されている。今まで対人関係ゲームはその拠って立つ理論として学習理論、行動分析、システム論の観点から説明されてきたが、今回は、新たに組織コミットメントの観点を加えて対人関係ゲームの可能性について論じる。

S-8

コロナ禍におけるカウンセリングの取り組みとこれから

- 企画者・話題提供者：井ノ山正文（教育環境研究センター）
- 話題提供者：厚海 啓子（開智日本橋学園中学・高等学校）
山口 正二（東京電機大学）
草柳 和之（メンタルサービスセンター / 大東文化大学）
- 司 会 者：福井みどり（ライフ・プランニング・センター）
- 指 定 討 論 者：井上 孝代（明治学院大学）

【企画要旨】

COVID-19によるパンデミックは人々の日常生活を大きく変えることとなった。また、日本赤十字社が昨年提起した「3つの感染症」（病気・不安・差別）に現実の課題として向き合うことを余儀なくされることとなった。非日常が日常化し、過度のストレスに晒され続けることは様々な場で多くの問題を生み出し、その対応が求められることとなった。学校をはじめとして多くの場においても感染防止対策が求められるようになり、種々の行事が中止され対人距離をとることが必要となった。今回はコロナ禍における「高校生の状況」「大学生の相談」「開業カウンセリングの状況」「障がい者地域活動センターの状況」等の観点から検討し、現状への理解と対応を考察しつつ、今後の方向性を模索する機会としてこのシンポジウムを企画した。

S-9

心理職に対するメンタルヘルス面での支援の必要性

- 企画者：春日作太郎（都留文科大学大学院）
- 指定討論者：井ノ山正文（教育環境研究センター）
西野秀一郎（跡見学園女子大学心理教育相談所）
- 司会者：早野 慎吾（都留文科大学）

【企画要旨】

提案者は、心理職や教師と接する機会に、「私の方がこころが折れてしまいそう」という声を聞くことが近年増え、一人の人間として安らぐ場を必要としているように感じる。

今日、心理職の社会での認知度は高くなったが、給料も労働環境も職場によってかなりの差が見られ、一昨年からのコロナの影響もあり、一部にはその労働内容と比べてかなり厳しくなっている場合がみられる。

職場によっては、約30分の面接を切れ目なくこなさなければならない時間帯が多く、事例の理解を深める記録を書く時間がない。面接は焦点が定まらずに終わり、co.のストレスが蓄積していく。

貧困や学級の問題や家族関係の絡む複雑な事例も増えており、関係機関との書類作成等も多くなる。

僅かな数で偏りもあるだろうが、春日が4つのクリニックの14人にアンケートを取ったところ、給料や身分の保証について約4割の人が不満であった。睡眠剤の常用や自己喪失傾向も見られた。

この状況はコロナ以前からの構造的問題が伺われる。

本企画では、現場の声をもとに、心理職のメンタル面の支援の必要性を考える。

P

- ▶ P-1 カウンセリングにみるフラクタル、対称性、パターン形成
上原 巖 (東京農業大学 地域環境科学部)
- ▶ P-2 スクールカウンセラーの配置状況と生徒指導上の諸課題との関連について
河本 肇 (広島修道大学健康科学部)
- ▶ P-3 構成的グループ・エンカウンターが感情・成長感に及ぼす影響
水野 邦夫 (帝塚山大学心理学部)
中地 展生 (帝塚山大学)
- ▶ P-4 人型シール PSS をカウンセリングプロセスに取り入れた典型的な表現の検討
思春期から青年期後期のクライアントとの対話を通して
住沢 佳子 (立正大学)
鈴木 明美 (帝京平成大学)
佐上 公子 (東京共有学園高等部)
- ▶ P-5 オンライン会議システムを用いた面接場面における自己開示
西澤 明里 (信州大学大学院)
- ▶ P-6 スクールカウンセラーの新しい仕事内容
学校不適應の予防
中橋美登里 (内閣府教育再生支援教官)
- ▶ P-7 社会情動的指標からみた高校生の自殺リスク
小野寺 彩 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
川上満里奈 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
片山 斗真 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
西塚 拓海 (札幌鈴木病院)
斎藤 徳 (日本医療大学保健医療学部)
新川 広樹 (弘前大学教育学部)
富家 直樹 (北海道医療大学心理科学部)
- ▶ P-8 学級規模の認知行動療法による抑うつ予防プログラムに関するレビュー
川上満里奈 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
斎藤 徳 (日本医療大学保健医療学部)
西塚 拓海 (札幌鈴木病院)
新川 広樹 (弘前大学教育学部)
富家 直明 (北海道医療大学心理科学部)

- ▶ P-9 抑うつ的反芻に対する反芻焦点化療法を中心とする VR を活用した介入方法の効果に関する検討

渡部 雪子 (山梨英和大学)
松村 雅代 (㈱ BiPSEE/ 高知大学医学部)
上木原公平 (㈱ BiPSEE/ 高知大学医学部)
- ▶ P-10 探索的因子分析によるカウンセリングの面接過程の検討の試み

富島 大樹 (清泉女学院大学)
藤生 英行 (筑波大学)
山口 豊一 (聖徳大学)
- ▶ P-11 相談者が遠隔カウンセリングで相談したい内容
対面カウンセリングとの比較から

田中健史朗 (山梨大学)
- ▶ P-12 学生相談における多文化カウンセリングの効果的な実践に関する研究

松田 英子 (東洋大学社会学部)
- ▶ P-13 児童青年版援助要請スキル尺度の開発 (1)
PROM 開発研究

本田 真大 (北海道教育大学函館校)
新川 広樹 (弘前大学)
- ▶ P-14 児童青年版援助要請スキル尺度の開発 (2)
内容的妥当性の検証

新川 広樹 (弘前大学)
本田 真大 (北海道教育大学函館校)
- ▶ P-15 自記式認知行動特性尺度の短縮版開発
WAIS-IV との関連から

山村 麻予 (関西福祉科学大学)
金子 茉央 (大阪大学大学院)
平井 啓 (大阪大学大学院)
- ▶ P-16 LGBTQ に対する大学キャンパス風土尺度日本語版の作成

佐藤 洋輔 (埼玉学園大学人間学部)
- ▶ P-17 いじめ容認態度を測定する尺度の信頼性と因子的妥当性の再検討

堀 孝司 (甲南大学大学院人文科学研究科)
小山 聡子 (さくメンタルクリニック)
福井 義一 (甲南大学)

- ▶ P-18 日本語版マインドフル・イーティング・スケール (MES) 作成の試み
 高橋 誠 (人間環境大学)
 鈴木 公啓 (東京未来大学)
 関谷 大輝 (東京成徳大学)
 森本 哲介 (兵庫教育大学)
- ▶ P-19 労働の場におけるパワーハラスメント生起要因尺度の開発
 佐竹 圭介 (広島国際大学)
 金子 周平 (九州大学)
- ▶ P-20 小学生保護者用養育行動尺度 (改訂版) の妥当性の検討
 併存的妥当性並びに因子的妥当性について
 濱口 佳和 (筑波大学人間系)
- ▶ P-21 ポジティブボディイメージスキーマ尺度の開発
 高橋恵理子 (日本学術振興会特別研究員)
 高橋 拓己 (東京電機大学学生相談室)
 桂川 泰典 (早稲田大学人間科学学術院)
- ▶ P-22 現実的楽観主義者による困難の克服と well-being 獲得のプロセス
 Nishaat Aneesah (創価大学教育学部)
- ▶ P-23 福祉現場の意思決定支援における Affectiontherapy
 evidence-based communication,EBC による伝え方
 高倉 恵子 (日本カウンセリング心理学研究所)
- ▶ P-24 人々は再犯リスクをどのように捉えているか
 高橋 哲 (お茶の水女子大学)
- ▶ P-25 大学生スポーツ競技者におけるスポーツ傷害受傷後の心理的変容
 菊地 創 (松蔭大学コミュニケーション文化学部)
 富田 拓郎 (中央大学文学部)
- ▶ P-26 保育者の自尊感情に関する検討
 2つの保育所での自尊感情調査の分析から
 有沢 孝治 (東海大学文化社会学部)
- ▶ P-27 浅い関係で用いられるスキルが報酬知覚に与える影響
 田中 圭 (聖徳大学心理・福祉学部)
 沢宮 容子 (筑波大学人間系)
- ▶ P-28 養育と愛着がメンタライジングに及ぼす影響プロセスの検討
 田中穂乃香 (早稲田大学大学院人間科学研究科)
 桂川 泰典 (早稲田大学人間科学学術院)

- ▶ P-29 友人間におけるストレス体験からの成長・ポジティブな変化
対処・行動に対する相手からの反応を含めた質的検討

飯尾 愛子 (帝京大学文学部心理学科)
- ▶ P-30 大学生における対人支援ボランティア場面でのストレスサーについての研究
経験の有無による比較及び不参加志向動機との関連

亀田 凌雅 (帝塚山大学大学院心理科学研究科)
中地 展生 (帝塚山大学心理学部)
- ▶ P-31 大学生における過去の傷つき経験を契機とする成長と被受容感および自尊
感情との関連

勝間田冬華 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)
堀井 俊章 (横浜国立大学教育学部)
- ▶ P-32 日経「私の履歴書」とカウンセリング (3)

林 潔 (白梅学園短期大学)
- ▶ P-33 対人関係ゲームの実践を動機づける要因

吉岡 典彦 (長野市立更北中学校)
岸田 幸弘 (松本大学教育学部)
田上不二夫 (筑波大学名誉教授)
- ▶ P-34 保育者養成における子育て支援に関わる力の育成についての検討 (1)
保護者の相談実態に関する基礎調査

桑原 千明 (文教大学教育学部)
君野 愛 (WITH GROUP ういず東日暮里保育園)
- ▶ P-35 キャリア支援者の職業的発達を促進・支援するプログラムの開発と効果に
関する検討

原 恵子 (筑波大学働く人への心理支援開発研究センター)
磯貝(大恵) 和子 (筑波大学働く人への心理支援開発研究センター)
岡田 昌毅 (筑波大学)
- ▶ P-36 教育支援センター (適応指導教室) の支援に関する研究 (1)
テキスト・マイニングを用いたスタッフへのインタビューの分析

柳井 智美 (教育カウンセリング心理学研究会)
米田 薫 (大阪成蹊大学)
- ▶ P-37 いじめられる側にも責任があるって本当ですか? その19
—いじめ被害者への有責性認知の理由のテキスト・マイニングの試み5—

福井 義一 (甲南大学)
小山 聡子 (さくメンタルクリニック)

- ▶ P-38 **小規模校の高校生を対象とした高大連携による心の健康教育の実践**
 片山 斗真 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
 川上満里奈 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
 堀田 真由 (北海道医療大学大学院心理科学研究科)
 西塚 拓海 (札幌鈴木病院)
 新川 広樹 (弘前大学教育学部)
 富家 直明 (北海道医療大学心理科学部)
- ▶ P-39 **大学生におけるパッションの種類と well-being との関連**
 久保 尊洋 (筑波大学)
 沢宮 容子 (筑波大学)
- ▶ P-40 **就職活動への不安や不合理な信念は就職活動に有効に作用するのか？**
 ー不安や信念と就職活動量や強みに関する要因との関連ー
 森本 哲介 (兵庫教育大学)
 高橋 誠 (人間環境大学)
- ▶ P-41 **特色と人的資源を生かした学生支援システムの構築**
 入学前相談と合理的配慮の実践
 熊倉 志乃 (國學院大學栃木短期大学)
- ▶ P-42 **大学生における気軽な相談を困難にしている要因についての検討**
 茅野 理恵 (信州大学)
 大場 美奈 (信州大学)
- ▶ P-43 **大学生における気軽な相談を困難にしている要因と性別・年齢・生活スタイルとの関連**
 大場 美奈 (信州大学)
 茅野 理恵 (信州大学)
- ▶ P-44 **公立小学校5年生に対する援助要請を促進させる授業実践に関する研究**
 授業実践 (「いじめの避難訓練」) を通して
 小沼 豊 (北海道教育大学)
- ▶ P-45 **不眠の心理教育が学生相談室への援助要請態度に与える影響**
 谷本 智佳 (福山大学保健管理センター)
 松本 明生 (福山大学人間文化学部)

- ▶ P-46 **利益・コストの予期と援助要請の関連 (1)**
援助要請実行の利益・コストに関するシステマティックレビュー
-
- 永井 智 (立正大学)
木村 真人 (大阪国際大学)
本田 真大 (北海道教育大学)
飯田 敏晴 (立教大学)
水野 治久 (大阪教育大学)
- ▶ P-47 **利益・コストの予期と援助要請の関連 (2)**
援助要請回避の利益・コストに関するシステマティックレビュー
-
- 木村 真人 (大阪国際大学)
永井 智 (立正大学)
本田 真大 (北海道教育大学)
飯田 敏晴 (立教大学)
水野 治久 (大阪教育大学)
- ▶ P-48 **新型コロナウイルス流行下における若者のコミュニケーションの変化**
—自由記述調査と変化に対する感情からの理解の試み—
-
- 藤原 健志 (新潟県立大学)
- ▶ P-49 **COVID-19 パンデミックがひきこもり状態の社会生活に与える影響**
-
- 野中 俊介 (東京未来大学こども心理学部)
境 泉洋 (宮崎大学教育学部)
- ▶ P-50 **コロナ禍における大学生の自尊感情への影響要因の検討**
-
- 山本 和美 (山梨大学)
- ▶ P-51 **コロナ禍の子育て負担と相談支援のあり方について**
-
- 高祖 常子 (認定 NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク)

一般社団法人 日本カウンセリング学会第54回大会 準備委員会



委員長：山口 豊一（聖徳大学）

副委員長：鈴木 由美（聖徳大学 非常勤）

事務局長：笈田 育子（NPO 法人カウンセリング教育サポートセンター）

田中 圭（聖徳大学）

都丸けい子（聖徳大学）

準備委員：石川満佐育（鎌倉女子大学）

小澤 真（聖徳大学）

佐伯 素子（聖徳大学）

沢崎 真史（聖徳大学）

齊藤 千鶴（聖徳大学）

関口 由香（聖徳大学）



一般社団法人日本カウンセリング学会第54回大会事務局

〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550

聖徳大学 8号館 7階 山口研究室内

E-mail：54jacsw@jacsweb@gmail.com